

## 今だから言える当時の出来事と震災から4年たったの想い

### K・Sさん(福島県・三春町)の手記

2011年3月11日、地震が起きた時、私は原発から45kmほど離れた福島県三春町にいました。町内の会社に勤務し、両親と私の3人家族で、とても住み心地の良い三春町で楽しく暮らしていました。幸せな穏やかな毎日を送っている最中の大震災は、一気に私たちの幸せな生活を奪い不安にさせ、悲しませ、苦しませ、何とも言葉に言い表しようもない思いにさせられました。

仕事中に起きた地震は、まるで悪い夢にうなされているようでした。どこからか聞いたこともない危険が迫ってくるような音が部屋中に鳴り響き、「何？何？誰かの携帯が鳴っているの？」と同僚と顔を見合わせていた瞬間、建物が揺れ始め、だんだん揺れが大きくなり、右へ左へ揺さぶられ、棚に置いてあったものがガシャンガシャンと落ち始め、柱や手すりにつかまっていなくて立ってられない状況でした。初めのうちは悲鳴を上げ、転ばないようにしがみついていることに必死でした。揺れが全くおさまらず、そのうち「誰か助けて。お願い。もう終わって。ここで死にたくない。」と心の中で叫んでいました。

「もしかしたら、私の人生はここで終わりかも。この建物が崩れて下敷きになって死んでしまうかもしれない。嫌だ。」

そういう想いが頭の中を駆け巡り、大切な両親や兄家族、婚約者、友達、親戚、沢山の人の顔が頭に浮かんできました。これほどまでに自分の死を意識し、ここで今自分は死を迎えるかもしれないと思ったことはなかったと思います。それくらい地震は大きく、沢山の人を犠牲にし、悲しみをもたらしました。この悲しみは地震だけでなく、その後の原発事故がさらに福島県民を苦しめました。「原発が危ない」その情報を聞いても全くピンときませんでした。自分の住んでいる県に原発があっても、離れているし、みんなほとんど知識がなく、当初はテレビで言っていることを信じるしかありませんでした。「ただちに人体に影響を及ぼすレベルのものではありません。」

この言葉を何度も何度も聞き、一方では放射能は危険だと聞き、どうしたらいいのか分からず、右往左往していました。このままここにいた方がいいのか、それとも少しでも原発から離れた所に避難した方がいいのか、その時は、どれが正しくてどれが間違っているのか分かりませんでした。原発が爆発した日も、食料もガソリンも灯油もなかったので、必死の思いで父と探し回り、ガソリンスタンドに並び、親戚の家に行き、ずっと外にいました。

15 日の朝、福島第一原発2号機で爆発音、4号機で爆発が起こり、いよいよ逃げなければいけないかと危険を察知しました。地震の後から不安で眠れず、夜は一晩中ヘリコプターの音が聞こえ、14 日の夜も寝ずに朝まで過ごし、ずっとテレビの報道を見ていました。原発が目を追うごとに危険な状態になっていくのをひしひしと感じ、ついに15 日の朝に、本当に危ないと思い、家族で相談し、少しでも原発から離れようと、必要な荷物を車に詰め込み、郡山の知り合いの家まで逃げました。ですが、もっと遠くへ逃げた方がいいのではないかと、でも行くあてもない。どうしようどうしようと言いながら、この現状が怖くて不安でこの先どうなるかも分からず、とにかくこの放射能から逃れたいという思いでいっぱいでした。

私たちのように逃げなきゃという気持ちで必死だった人はものすごくたくさんいました。特に子を持つ親は…。私たちは郡山の知り合いの家へ着くやいなや落ち着いてもいられず、テレビでは原発の様子がずっと映し出され、次は何が起こるのか、また爆発か、人を死に至らせるのか、緊張と恐怖と不安に押しつぶされそうなくらい緊迫していました。

また家族会議が行われ、迷ったあげく再び外へ出ました。東京方面へ向けて再出発しました。でも道はどこも渋滞。全く前へ進みません。みんな避難する車です。外は雨が降っていました。ガソリンも地震とこの原発事故の影響で入ってきません。次はいつ入れられるかわかりません。ガソリンの量も考えながら行先を考えなければなりません。渋滞にはまったままではガソリンがどんどんなくなってしまいます。途中、トイレに寄りました。雨の中外に出て歩いたので、全身がぬれました。どのくらいの放射能をそこで浴びたかわかりません。爆発後の雨が一番危なかったと、しばらくしてから聞きました。三春の家から出ずにじっとしていた方が一番安全だったのかもしれない。必死の思いで逃げたけれど、どこまでも渋滞が続いていて何時間たってもこれでは脱出することはできないとあきらめ、途中で引き返し郡山の知人の家へ戻ってきました。そして、福島市に住んでいる兄と連絡を取りました。

私たちの状況について話すと、すごいけんまくで怒られました。「何でじっとしていないんだ」と。確かに無駄なことをし、あげくの果てに放射能もあび、ガソリンも減り、良いことは何もありませんでした。でも、その時私たちは本当に必死で考えた結果の行動だったので、そんなに責めないで欲しいと言いました。どれが正しくて、何が良くて、どうすることが最善なのか、どの情報が正確なのか、全く分からない中で追い詰められ、とにかく私たちも必死で冷静に判断することが出来ませんでした。

「お兄ちゃんたちは避難しないの？」と聞くと、「俺たち(奥さん、子供2人、奥さんの両親)はここにいるって決めたから…。奥さんの両親もここにいるって言うから」と言われました。この言葉を聞いたとき、こんな事態になってしまったこと

を悔やみ、むなしくなりました。

知人の家に戻ってから、みんなでこたつで寝ました。一人一枚の毛布しかなかったので、とても寒かったです。寒くて何度も何度も目が覚めました。次の日もそこで1日を過ごし、夜寝ようとしている時に、父が「何だか具合悪い」と言いました。熱があり、このままでは体調が悪化すると判断し、かかりつけの病院に電話をかけ、車で30分かけてまた原発方面の三春町に戻りました。

郡山から三春までの道のりはまるで映画のワンシーンのように真っ暗で人も車も通らず町の電気も消え、本当にゴースタウンのようでした。いつもにぎわっていた町が怖いくらい静かで、三春に帰るまでほとんど車とすれ違うこともなく、この町に誰も住んでいないのではないかと思わせるくらい静かでした。病院に到着し、診察を受け、いつもなら入院させてもらえるくらいの症状なのに、その日は浪江の方から避難してきた人たちでいっぱい入院することはできないと断られ、点滴をして家に帰りました。

帰って寝たのが朝方4時ごろでした。少しの睡眠をとり、起きてテレビをつけるとまた原発の映像。私たちは父の体調を考慮し、父の意見を尊重し、ここにいると決め、家族全員で体を寄せ合いながら、一つの部屋で寝ることにしました。正確な日付は忘れてしまいましたが、3月17日か18日、ポストを見ると、私宛に手紙が届いていました。町役場からです。

「放射能が広範囲に発生する恐れがあり、町民のみなさまの健康を守るためにヨウ素剤を配布する。ヨウ素剤には、放射能による甲状腺がんの発生抑止効果がある。」という内容でした。3月15日付の文書でした。外に出ることが怖かったのですが、帽子やマスク、手袋をしてなるべく肌が出ないようにして取りに行きました。いつ飲めばよいのか聞いてみると、「いざという時、逃げる時に飲んでください。」と言われました。

私はその「いざ」がいつなのか分からず、ずっと飲まずに今でもとってあります。本来は3月15日に配布されて、その日に飲むのがベストだったのだと思います。でも私は3月15日の朝に家を出て郡山へ向かい、一番線量の高いと言われた雨にうたれ、放射能が流れている方へと避難し、ヨウ素剤も飲まなかった。自分の判断の間違いでこのような結果となってしまいました。とても後悔しました。

私たちがこの混乱の中、郡山に住んでいた私の婚約者は、爆発した時これは危ないと勘が働き、いち早く脱出の準備をしていました。地震のあと、しばらく携帯電話も家の電話も繋がらず、連絡が取れなくて心配していましたが、連絡が取れた時には「俺は大丈夫。大阪に行く。」とのことでした。私も一緒に行こうと言われましたが、ここにいると決めた両親を置いては行けないし、父の体調も不安だったので、

「私は行けない。一人で逃げて」と言いました。私は婚約者にこのまま一生会うことが出来なくなるかもしれないと本当に思いました。離れ離れになったことを周りの誰にも言えず、一人で涙をこらえ現状と必死で向き合いました。最後に「絶対結婚しようね。絶対だよ。」と誓いあったメールを信じて、福島の地で再び生活が始まりました。

私たちが離れ離れになった原因は言うまでもなく放射能という問題です。今は結婚して西宮で新たな生活の基盤を作ろうと二人で頑張っていますが、この結婚に至るまでには、相当な苦労がありました。お互いに離れ離れになった後も、連絡を取り合い、主人は西宮の市営住宅を見つけ入ることができ、少し落ち着いた5月の連休に、私の父と結婚の話をするため福島に来ました。その後、もう一度夏に私の両親と兄夫婦に会いに来て、結婚が正式に決まりましたが、2011年11月に入籍するまで、ずっと言い争いの日々でした。

その言い争いというのは「私は福島で暮らしたい。私の両親も兄夫婦もかわいいかわいい甥も、大切な友達も親友も、好きなお店も、今まで慣れ親しんできた町も、たくさん遊んだ自然も、私の人生そのもの、お金では買えない私の宝物すべてを置いて関西には行けない。行きたくない。」という思いと、主人の「放射能問題は どうするの？生まれてくる子どもに障害があったらどうするの？」という意見の対立が何度も何度もあり、「関西に来ないんだったら結婚はない。俺は福島には行かない。」とずっと言われ続け、震災から2年たって母子避難されている夫婦間で、今問題となっている離婚と同じように、私たちは震災後すぐにこの問題にぶつかりました。

私は毎日毎日悩みました。だって大好きな町を誰が簡単に捨てられますか？生まれ育った故郷をいとおしく思うのは当然のことだと思います。福島にいたいけど放射能問題がある。結婚もなくなる。でも両親を置いていくこともできない。入籍するまでの8ヶ月間ずっと苦しみました。その結果、両親を兄夫婦に預け、私は関西に来ることを決めました。

2011年12月下旬から西宮に住み始めました。西宮に来てから、最初は、自分の大切なものすべてを置いてきてしまった悲しみと辛さと絶望感で苦しくて、私はずっと一人で誰にも知られないように泣きました。知られないようにと言うよりは、誰にも言う人がいませんでした。福島を離れての生活は、知り合いも友達も話す人もおらず、全く知らない土地で出かけることさえも怖くて、2ヶ月ぐらいは家に閉じこもりっきりでした。

福島にいた時は、いつも友達と出かけたり話したりして楽しく過ごしていたのに、ぽっかり穴が開いたように、福島の友達の中に私がいたことさえ、忘れられてしまいそうで、すごく寂しかったです。この寂しさは今も変わりません。西宮で知り合い

や友達ができて、孤独を感じます。新しい土地で自分の居場所がなく、孤独になり、やっぱり関西に来るんじゃないかと何度も思いました。放射能から逃れた安心感よりも寂しさや辛さの思いの方が強く、福島に戻りたいと心の中でずっと叫んでいました。今でも福島が大好きなので、戻れるのなら私は戻りたいです。でも戻れないのが現状です。

冷静に考えると食べ物や生活面において、福島にいる時よりもそれほど放射能を気にしなくてもいいので、これで良かったのだと少しずつ思えるようになってきましたが、両親も兄家族もみんな今は線量の高い本宮市に住んでいます。住んでいる環境も不安だし、水や食べ物も不安です。きっと汚染されているものも口にしているかもしれません。避難すればいいのと思う方もいらっしゃるかもしれません。でもしたくてもそれぞれの家の事情で出来ない人も沢山います。その人本人でなければ分からないこともあります。ですが、この現実を受け止め、受け入れ、不安ながらも仕方なくそこに残って生活することを決めた人たちも沢山いて、苦しんでいるということをみんなに知っていて欲しいです。

すべて保証されているならまだしも、被害を受けたのに何の保証もなくじっと耐えることしかできない人もいます。

甲状腺検査で甲状腺がん、その疑いがある子供は127人と公表され、子どもたちに健康被害が出ているのも現状です。きっとこれからもっと増えることでしょう。私も甲状腺検査と血液検査を自主的に行っています。この検査もお金がかかるものです。

私は東神戸病院で検査を受けています。結果は、震災からちょうど3年がたち、甲状腺機能低下(橋本病)とPTSDの疑いがあると診断されました。疲れやすい、脱力感、集中力の低下、免疫力が低下し風邪をひきやすくなった、頭痛などの症状があらわれています。また、大変音に敏感になってしまい、普通に生活している中で極度にドキドキしたり恐怖を感じたりすることもあります。

私は西宮に避難してくるまでの9ヵ月間に福島の野菜や水、高い線量地域での生活をし、内部被爆したのかもしれませんが。そして原発爆発後の雨にあたったことも原因の一つかもしれません。今や内部被爆は福島の問題だけでなく、汚染された食品が流通して、関西にもやってきています。みなさんも知らず知らずのうちを外食している中で食べているかもしれません。

汚染された地域だけでなく、全国のみんなが危機意識を持って生活していかなければならないことだと思います。そうしなければ、未来を生きる子どもたちも守れません。誰もが無料で受けられる放射能健康診断が必要だと思います。

私はこれまで福島県から避難してきたということをあまり言ってきました。

が、年を重ねていくごとにこんなに重大な問題が世間から忘れられていくということを実感し、まだまだ放射能問題で解決されていない事は多く、むしろこれから出てくる健康被害や問題に着目していかなければならないと思うので、絶対に忘れられてはいけないことだと感じています。

この放射能に対して、それぞれの人がさまざまな問題をかかえています。母子避難で家族とずっとバラバラで暮らしている人、子どもの健康被害、大人の健康被害、食べ物、環境、住宅、経済面、生活すべてにおいて問題が山積みです。

私はこれから子どもを産みたいと思っています。健康で元気な子どもが生まれてきてくれるか、とても不安です。これらの沢山の問題をどうしていったらいいのか、みなさんにも一緒に考えて頂きたいです。こんな風にしたら良いのではないかと、私も協力しますという方がいらっしゃいましたら、どうか私たちの力になってください。避難してきた人たちの話を聞いていただくだけでもありがたいです。震災当時のことをもっと聞きたいという方がおられましたら、答えられる範囲でお答えしますので、どうぞ聞きに来てください。

福島では甲状腺癌、その疑いがある子供の数が年々増加しています。これ以上増やしてはいけません。地震、そして原発事故が起きた事実を絶対に風化させてはいけません。ずっと伝えていかなければならないと思っています。私は自分に出来ることは何かと考えたとき、作ることが好きなので物で伝えていこうと思いました。福島県会津地方に伝わる伝統工芸品、会津木綿で小物を制作することにしました。一人でも多くの方の手に取っていただき、これからも福島を伝えていこうと思い、イベントなどで販売しています。そして売り上げの一部を、放射能被害の大きかった地域から避難してきている子供たちに送っています。

最後に母子避難の方、ご夫婦で避難されている方、単身で避難されている方、自主避難の方など、避難してきた状況や経緯は様々ですが、その方々が避難してきたから良かった、それで終わりではなく、今でもそれぞれの悩みや問題を抱え、ぶつかりながら一生懸命生きていることをわかっていて欲しいです。そして、今もなお福島で毎日放射能と向き合いながら必死で生きている人達がたくさんいること、避難したくてもできない人たちがいるということも、忘れずにいて欲しいです。

2015年6月